



2011・6

**SORA** 37号

# 地底

柴田 佐知子

羽抜鶏怒り収まるまで走る

一切を断ちて山椒魚の貌

地底など知らぬ知らぬと蟬しぐれ

汗の子の家路といふも遊びつつ

意のままに伸び振花となりにけり

沸く前の空気の粒や目借時

―「俳句研究・夏号」より―

墓穴を出て笹竹をさばきけり

夕桜逢ひたくなれば来るがよい

佐谷・建正寺

堂裏はみどりの崖や御開帳

み仏は裾より煤け御開帳



また一人手を引かれ来る御開帳  
村中の男の子は力士春まつり  
御開帳咽せて堂より出てきたる  
遊びたる衣吊るせば花の山  
磔の姿に鶴の帰りけり  
声出さばくじけてしまふ葱の花  
玄海の紺もて荒るる旧端午  
矢車の光となりて音高し  
戦陣のごと崎に立つ武者幟  
鯉幟とくに尾鱗を打ち合へり  
晴れ渡る峰を指して鮎上る  
文字の海ひろがつてくる青葉の夜  
別れたる髪ねんごろに洗ひけり

桃の花

大地真理

野焼

松田明子

貴賓室の天井高し花の雨

大阿蘇の表も裏も野焼の日

百年の一本桜ふぶきけり

音たてて野火は斜面をころがれり

波稜草の赤き根洗ふ幸田文

駆け抜けし炎のあとの野火埃

座布団にもたれて祖母の日向ぼこ

風を読み風に従ふ野焼勢子

二十六聖人の生国遠し鳥帰る

噴煙の真直ぐ上る厩出し

童謡のおほかた悲し桃の花

羽衣を掛けし一樹の芽吹きけり

磨崖仏に残るべんがらまむし草

残る鴨岸を遠くに相寄りし

風車売も来てゐる秘仏寺

一声を鳴いて漂ふ残り鴨

# 母の日

宮井知英

# 鳥の巣

秋 千晴

老梅の咲くは太息吐く如し

春のコート邪魔になりたる昼下り

病みてより見えて来しもの桜の芽

番鴨水輪一つに納まりて

冴返る術衣は浅葱色をして

棟上げの材木宙に春日差す

春の月術後の身内透き通り

鳥の巣の下に不用の木切れ散る

花満開遺書を書く気の疾うに失せ

鳥の巣の仕上げに土も運びをり

流木に鴉の遊ぶ啄木忌

ふらここを漕ぐだけ漕いで下校する

たかなや向かう山から猿の来て

桜咲き奥の院まで賑はへる

母の日や妣のもの着て母の座に

小声にて源氏螢の住処なり

頬白鳳蚕華 出港 吉村 撰 護

鶴帰る岬の鼻に独り在れば

花に酔ひ人に酔ひたる御開帳

木<sup>き</sup>五倍子<sup>ぶがいし</sup>咲き森の組曲はじまりぬ

防火線切つて山焼き始まりし

朝さくら陰翳雲のごとくあり

震災や空縦横に初燕

ひとひらの落花の乱す静止像

復興の息吹高まり夏来る

南朝の苔をまとへる山さくら

震災の海初夏の定置網

頬白の吉野便りに耳を貸す

妙齡の母の夢見て明易し

杉襖そびらにひかへ山さくら

来し方はすべて御破算心太

黄檗のわたり来し海大霞

出港の銅鑼鳴りひびく夏休み

# 鳶の弧

安武 晨子

# またの世

堀江 恵子

春闌くる佛間のほかは灯さずに

猿沢の池にしだるる桜かな

二位の尼いまに侍れる余花の宮

菰巻きの脱がされてゐる城の松

吊橋に風走らする青嵐

紅梅の白梅のこゑ骨壺に

段畠を守り継ぐ谷戸の花は葉に

またの世へ白足袋のまま舞ひながら

花は葉に武家の名残の屋敷址

参道のどこからめくれ花筵

悲話のこる在所の宮は霞む中

花筵空濠にしく天守閣

お末社に賽を投ぜむ谷若葉

亀鳴いて東大寺裏壁白し

鳶の弧のおぼろの空を眠らする

滴りやそのうちに遠國の娘は帰る

## 花の谷

矢野百合子

## 楓の芽

あさなが捷

観音を抱きてしだるるさくらかな

入学式羽織の母と並びけり

御開帳蝋燭の灯の揺れやまず

闘犬の濫は錆びつき楓の芽

誰もみな煙にまみれ御開帳

藤の花堂守に菓子すすめらる

観音堂裏にまはればすみれ草

樟若葉鎖の果の奥の院

たえまなく読経の響く花の谷

しやぼん玉歪みとろりと丸くなる

花まつり子供相撲も開かれて

あきらめしごとくに消ゆる螢かな

土俵にまく塩の眩しき春まつり

伊勢海老の夏の生け簀を後ずさる

胸反つて太鼓を一打山桜

地団駄を踏むおとうとにかぶと虫



# 影法師

小林朱夏

# 薫風

高倉恵美子

花散りて山に戻りし桜かな

山焼きしあとの道にて遊びし頃

げんげ田の盛り上がりくる灘の風

グライダー苳畑に落ちにけり

鞆鞭を漕ぐぞ影法師付いてこい

風船をつま先で蹴る膝で突く

何ひとつ持たずこの世へ葦草

養生の日々に飽くなり春の月

天空の糸に絡まる告天子

薫風や六十年ぶりの友の文

土割つて筍山の動きだす

逝くことも容易くはなし衣更ふ

青嵐仏のそばに座禅棒

楽しみは夫の植ゑたる茄子トマト

目が合へば子牛近づく合歡の花

リハビリの試歩のゆらゆら走り梅雨

夕  
桜  
苑  
実  
耶

春光や赤子の爪を切る窓辺

春の雪同窓会が馴初めに

とりどりの京の漬物山笑ふ

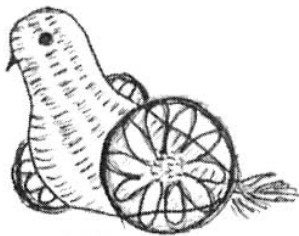
本堂へ桜吹雪と共に入る

開帳の世話人席に同級生

夕桜停車の窓を塞ぎをり

わらび野や肥後の赤牛散らばれり

今日のことつぶさに話す新入生



# 空作品評

柴田佐知子

たかんなや向かう山から猿の来て 宮井 知英

「たかんな」は筍のこと。猪に筍山を荒された話  
はよく聞く。私も見たことがあるが、柔らかいところを食べ散らしていた。猿も筍は好物で、器用に皮を剥いて食べるのか。そろそろ筍が出た頃だろうとやってきたのである。猿の貌や姿がユーモラスに見えてくるのは、「向かう山から猿の来て」という言葉遣いの軽妙さによるものだろう。何度読んでも可笑しい。「たかんなや」という上五の置き方もうまい。

風船をつま先で蹴る膝で突く 高倉恵美子

ふわつと落ちてきた風船をつま先で掬うように蹴り上げる。右手も左手も膝も…体すべてを使い途切れないようにつく風船。「つま先で蹴る膝で突く」という軽やかなリズムが見事に生きている。

両国のざんばら髪やつばめの子 山田 正子

両国と言えば国技館と、東京には遠い私でもつと繋がる。あたりには相撲部屋も多い。掲句のざんばら髪の主はまだ髪が伸び揃わず、鬘が結えない若い相撲取りであろう。それにしても「両国のざんばら髪」という単純にして鮮明な措辞が何とも魅力的だ。すすすす育つ「つばめの子」との取り合わせも生き生きとした効果をあげている。

鞦韆を漕ぐぞ影法師付いてこい 小林 朱夏

「鞦韆」は春の季語。中国で冬至から一〇五日目の「寒食」の日に、宮殿で官女が「鞦韆」で遊んだことから春の景として詠まれてきたもので、「ふらんこ」「秋千」「ふらんこ」「ふらんど」「ゆさはり」「半仙戯」とも言う。ふらんこは公園等に一年中あるが、伝統的な季感がこの季語の軸となっている。勢いをつけふらんこを高く漕ぐ元気な子供の姿が「影法師付いてこい」という自在な表現で詠みとめられている。同じ作者の〈番犬のむだ吠えばかり子供の日〉も楽しい。類想のない「子供の日」の作品である。(以下略)

空作品抄  
柴田佐知子抽出

連山を引き連れてゐる鯉幟

花豌豆逃ぐるを知らぬ島の猫

浅蜷めし父母亡き家の梁軋む

地震いまだうすくれなゐに木の芽山

花屑を啜へて鯉の浮き上る

荷物提げめまとひに首振つてをる

二十六聖人の生国遠し鳥帰る

駆け抜けし炎のあとの野火埃

たかなや向かう山から猿の来て

ふらここを漕ぐだけ漕いで下校する

高倉 和子

中田みなみ

荒井千佐代

服部 早苗

柴田志津子

だいじみどり

大地 真理

松田 明子

宮井 知英

秋 千晴



南朝の苔をまとへる山さくら

出港の銅鑼鳴りひびく夏休み

春闌くる佛間のほかは灯さずに

またの世へ白足袋のまま舞ひながら

観音堂裏にまはればすみれ草

闘犬の檻は錆びつき楓の芽

鞆を漕ぐぞ影法師付いてこい

風船をつま先で蹴る膝で突く

本堂へ桜吹雪と共に入る

翻る黒は僧なり椽若葉

手を引かれ泣いてゆく子や立葵

つばめ来る農学校に深き井戸

四方より子猫出て来る殉教地

番犬のむだ吠えばかり子供の日

鳳 蛮 華

吉村 摂 護

安武 晨 子

堀江 恵 子

矢野 百合子

あさなが捷

小林 朱 夏

高倉 恵 美 子

苑 実 耶

宮井 知 英

柴田 志 津 子

織 田 高 暢

矢野 百 合 子

小林 朱 夏

鯉のぼりぐんぐん雲を引き離し

青春のどこかに讚美歌夏薊

蛇穴を出て先づ人を驚かす

修学旅行団歩むに春の砂利ほこり

青き踏むひとつ覚えのわらべ唄

両国のざんばら髪やつばめの子

白き根のすべてを見せてヒヤシンス

散るさくら水面に京の空蒼く

格子戸に誘はれ路地の黄水仙

千代紙の青に置くなり桜貝

虫食ひの葉物を販ぐ遍路徑

たんぽぽ黄壁がキャッチャーミットです

養殖のごと生きてをり春の風

浮人形胴体はづし干してをり

原 友子

山内 碧

松田 明子

鳳 蛮華

安武 晨子

山田 正子

白水 良子

桜三 奈子

清水 量子

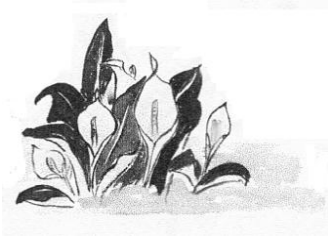
亀井 紀子

池田 華甲

田岡 千章

長 節子

秋 千晴



辛夷の芽捨て猫庭を闊歩して

鐘つけば冬の銀河のこぼれ落つ

ひらきゆく牡丹に炉心思ひをり

阿蘇五岳母となしたる雲の峰

花影の一畳におく茶筌かな

忘れ物届いています春満月

空中でうぐひすの声ぶつかりさう

ひとつぶの米は宝と寒雀

入彼岸渦なし落つる堰の水

小流れを左右に跳んで芹を摘む

住人は地味で寡黙な薔薇屋敷

鶴折ればこころ鎮まる春疾風

釣れずともよし父と子に春日差

薫風や子供相撲の白まはし

苑 実 耶

吉 田 葎

古 川 夏 子

吉 村 摂 護

堀 江 恵 子

今 井 春 生

大 地 真 理

栗 原 京 子

野 畑 小 百 合

石 川 叔 子

田 代 貞 枝

仲 里 奈 央

青 木 朋 子

あ さ な が 捷



黄砂来る胡楊紅柳の香もあらず

鳥曇り波のさらひし北の町

雁渡るシカゴにカポネいた時代

岩を捲く走り根強し春の潮

辛抱の昭和ひとけた梅古木

葉ざくらや谷戸塞ぐ雲広がりて

高熱の子の息ばかり春の夜

能面の母に似て来し薪能

菜の花や群青の袖ひるがへす

ひらひらと落ち行く先は花筏

葉桜や医師として診る我が子の齒

聞き直しやはり聴こえずあたたかし

如月や目覚まし時計なほも鳴る

中原俊之

遠山のり子

岸千手

ふじの茜

片田きく

小川涼

乾有杏

星原悦子

湯村真翠

堤堅策

白木原裕毅

神谷耕輔

内藤玲二